

## 宗教を通じた死生の意味構成

### — ある女性高齢者のライフストーリーへの事例検討 —

国立精神・神経センター 精神保健研究所  
川島大輔

#### 要約

宗教は死生の意味づけに多大な影響を及ぼすものであるにもかかわらず、従来の研究では十分に検討されておらず、とくにわが国の宗教と不可分な「家」という社会文化的文脈に対する注意をほとんど払ってこなかった。さらに死と生の意味づけの多様かつ豊かな連関も、十分に掬い得てきたとは言い難い。そこで本研究では、浄土真宗の門徒である1名の女性高齢者のライフストーリーを分析することで、死生の意味づけと宗教との多様な関係性について検討した。結果、家の宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロセスが描き出された。またインタビューのプロセスにおけるアイデンティティの構成についても検討を行った。

キーワード：死生の意味づけ、宗教、高齢者、家、ライフストーリー

#### I 問題と目的

##### (1) 老年期の死の意味づけと宗教との関連

老年期を生きる個人は、人生における発達の最終段階において、統合対絶望という危機の解決を通じて、死に折り合いをつけなければならず (Erikson, 1950/1977)、そのためには死と生に何らかの意味を見出すことが必要である (e.g., Frankl, 1946/1957; Wong, Reker & Gesser, 1994)。その際、宗教の影響は大きく、これまでも欧米を中心に多くの研究蓄積がなされてきており、概ね宗教への傾倒が死後世界の信念や死の受容、そして低い死の不安と関連することが示唆されている (川島, 2005)。一方、わが国ではたとえば金児 (1997) が、宗派に関係なく信徒は非信徒よりも来世信仰が強いと述べているのに対し、そうした傾向はみられるものの、本邦の高齢者は総じて死後を肯定的に評価することは少なく、天国や死後の世界といった宗教的信念は高齢者の強力な支えとはなっていないとの報告 (河合・中里・下仲, 1996) もあるなど、研究量の不足にもかかわらず一致した見解が得られていない。

この研究結果の不一致についてはいくつかの問題点が指摘されているが (e.g., 川島, 2005)、とくに死後の理想世界や死の受容といった、死生観の「死」の側面に専ら焦点が当てられていることの問題が大きい。つまり高齢者の死生観は、その人が歩んできた人生の結果として存在するものであるため、その生活史を抜きにして理解できない (伊藤・永崎・一柳, 1991) にもかかわらず、これまでの研究は本来不可分なはずの人生の意味づけとの関連を軽視していたのである (石坂, 2006; 川島, 2008)。したがって、死と生の意味づけに宗教がどのような影響を及ぼしているのか、また死と生の意味づけが生涯にわたってどのような連関を有しているのかが明らかにされなければならない。

また、質問紙偏重の現状においては意味づけの豊かさを十分に掬い得ていないという方法論的問題が指摘されている。つまり近年盛んに行われてきた死への不安や態度の尺度開発とそれを用いた質問紙調査に代表される数量化のアプローチは、非常に大きな成果をあげたものの、それによって意味の豊かさがそぎ落とされてしまっているとい

う問題である (e.g., 川島, 2005; Neimeyer, Moser & Wittkowski, 2003)。

その中であって、死を巡る複数の真実や多様な理解の仕方をもたらす質的研究に大きな関心が寄せられており (Carverhill, 2002)、とくに「ナラティブ・アプローチ」(narrative approach: やまだ, 2006; 川島, 2007) はこれらの問題を払拭する上で有効な方法である。

### (2) 物語 (ナラティブ) による意味への接近<sup>1</sup>

1990年代からのナラティブ・ターンと呼ばれる認識論、方法論の変革以降、ナラティブは質的研究の中核に位置する (やまだ, 2006)。ここでの物語 (ナラティブ) とは、経験を組織化し意味づける「意味の行為」(Bruner, 1990/1999)、あるいは2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為 (やまだ, 2000) と定義される。とくに物語は、自己の一貫性や関係性に亀裂が生じたとき、あるいはこれまで想定していた世界が崩壊したときに求められることから (Neimeyer, 2000)、そうした亀裂をもっとも顕著に生じさせる死別や自らの死に直面した人々の意味づけに迫るために、物語という視点を導入することは極めて有益である (川島, 2007)。また既述の問題点と関連して、ナラティブ・アプローチは唯一の真理に支配されるのではなく、多数の筋立てや複数の物語を許容することから (やまだ, 2000)、死と生、および宗教との多様かつ豊かな関係性を描き出すことが可能である。

このナラティブ・アプローチに基づき、たとえば、やまだ (2007) は、人が他者の死を物語行為によって意味づけていく心理プロセスに迫った、一連の先駆的研究を行なっている。また川島 (2008) は、老年期にある僧侶が宗教的物語をどのように取り込むことで死の意味を構成してきたのかを描き出している。しかし全体として死生の意味づけへのナラティブ・アプローチは本邦では散見されるに留まっている上に、語りを扱った研究に対する問題も指摘されている。

つまり第一に、従来のライフストーリー研究では、「個人」が中心であり、家族や世代間伝達などを含み、より幅広い時間軸の語りに自らをどのように位置づけていくのかという視点が欠落していた (Yamada, 2004)。これは死生の意味づけと宗教との関連についても同様であり、わが国の宗教を取り巻く状況を考慮すれば、欧米のような個人的な信仰とは異なる、家の宗教という文脈について十分な検討が必要であろう。それは家と自己をどのように意味づけ、結びつけるかということでもあり、とくに封建的な家制度が顕著であった時代を生きてきた女性高齢者にとっては、結婚前の家と結婚後の家の異なった宗教的土壌とどのように折り合いをつけることで、宗教および死生の意味づけを構築するのかを、その発達プロセスとともに明らかにしなくてはならない。

そして第二に、従来の研究では死生の意味づけが、誰に対しどのように語られたかという側面にはそれほど注意を向けてこなかった。しかしインタビューにおける調査対象者は、適切な質問をしさえすれば、彼ら自身の内部に保存している事実や経験の内容を提供してくれる、受動的な「回答の容器」ではない (Holstein & Gubrium, 1995/2004)。むしろインタビューという場において、語り手と聞き手が協働で意味を構築しているのである (Holstein & Gubrium, 1995/2004; Kvale, 1994)。然るに、語られた内容とともに、どのような語りの文脈において、いかに語られたのかという「語りの空間」(徳田, 2006) に対しても目を向けるべきである。

### (3) 本研究の目的

上記の問題点を鑑み、本研究では、ナラティブ・アプローチを採用することで、宗教とのどのような関わりを通じて死生の意味づけが構築されるのかを記述することを目的とする。またその際、従来のライフストーリー研究の問題点を払拭すべく、家という社会文化的文脈との生涯を通じた関わりの中で、またインタビューという「語りの空

間」の中で、意味構成の有り様を描き出す。

## Ⅱ 方 法

### (1) 調査対象者

#### a. 理論的サンプリング

質的研究においては、研究の問いを明らかにする特徴的で典型的なサンプリングを実施することが必要であるため（能智、2004）、本研究の対象者は、宗教が提供する物語と死生の意味づけとの関係性について豊かに語り得る存在でなくてはならない。また家という文脈を考慮する上で、たとえば結婚という明確な人生の転機について語るものでなくてはならない。さらにどのような宗教に焦点化するのも重要な問題であるが、本研究の問いに照らし合わせると、わが国の家制度と密接な繋がりを持ち、かつ豊かな死生の物語を提供していることが重要である。その意味において仏教、とくに西方極楽浄土の思想を通じて日本人の心性に深く影響しており、死についての聖なる物語が豊かに見られる浄土真宗への着目は、既述の家制度との関係も含め、本研究の問いを明らかにする上で有益であると思われる。そこで本研究ではその条件をもっとも良く満たす、浄土真宗の門徒である1人の女性高齢者（Cさん）の語りを事例検討する。

#### b. Cさんについて

Cさんは関西圏内に住む、女性高齢者である。インタビュー当時69歳であり、夫と娘と同居していた。健康状態は良好であった。なおCさんの家は江戸時代から続く長い歴史を持ち、その初代から浄土真宗との関わりがあったという。筆者は継続的に行っていた浄土真宗へのフィールドワークを通じてCさんと知り合った。なおCさんとの出逢いが筆者のものの見方に大きく影響したことも、事例として採用する重要な根拠であるが、この問題については総括的考察において改めて取り上げる。

### (2) 調査方法

生涯にわたる死生の意味づけと宗教との豊かな関係性を語るCさんのライフストーリーに着目したインタビューを実施した。本研究において直接対象となるインタビューは約90分行なわれ、内容は同意を得て録音した。さらにフィールドノートも作成し、表情や、調査の開始から終了までの状況についても書き留めた。

本研究は1名の対象者に対する事例検討を行うものである。質的研究における対象者数に関して最も重要なことは、研究者の問いや理論的枠組みを明らかにする上で妥当か否かという問題である。またそこで得られた知見が有益なものであるかの判断は、理論やものの見方の刷新を促すものであるのかに左右されるといえる。その意味において本研究の問いを明らかにしうる1つの事例への焦点化は有用な戦略である<sup>ii</sup>。

### (3) 分析方法

語りの分析方法には様々なものがあるが、本研究では死生の多様な意味の連関を把握するため、創造的総合としての新たな意味連関を作ることに特色をもつKJ法（川喜田・松沢・やまだ、2003）を採用した。なお実際にはやまだ（2003）に倣い、トランスクリプトの作成、2次データへの加工、意味連関図の作成まで一連の手順で行った。トランスクリプトの作成にあたっては、声のトーンや抑揚などを盛り込みつつ、意味内容の把握が平易なものを目指した。また2次データへの加工においては、語りの文脈をより深く理解するため繰り返し通読した上で、1つの発話の読点ごとに区切り、通し番号をつけた。そして本研究の問いに関連すると思われる死と生の意味づけと宗教との関わりについて、また家の歴史的な文脈について言及されている語りを抽出し、カードに変換する作業を行った。さらに抽出されたカードを意味のまとまりを成すもの同士で集め、個々の意味づけを反映したラベル、つまり加工された意味づけを作成した。これらの手順を繰り返し、下位ラベル、中

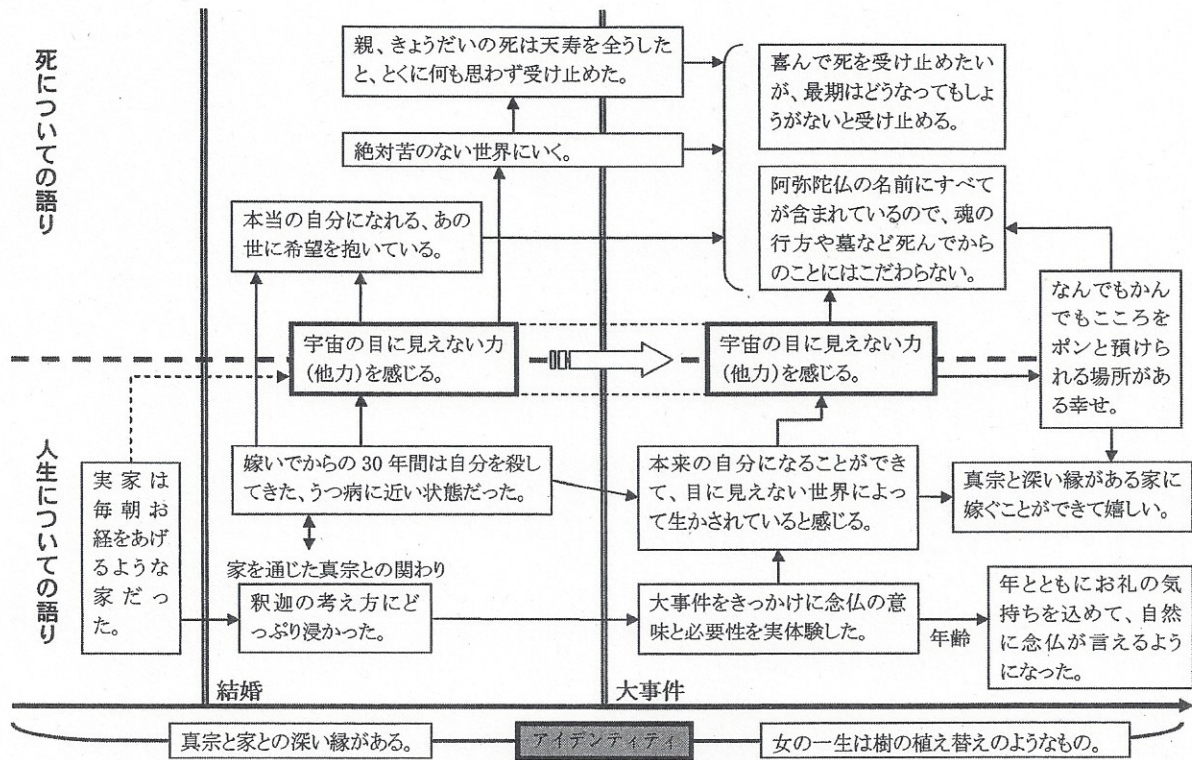


図1 宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロセス

注. 図の垂直軸が転機を、水平軸が時間を表わしている。また図の中央より上段が死と宗教についての語り、下段が人生と宗教についての語りを示している。また最下部は、これら死生の意味づけを支える、家という文脈でのCさんのアイデンティティを表わしている。

位ラベル、上位ラベルそれぞれの作成を行うことで意味のまとまりを得た。

さらに転機を含む意味づけの生涯発達プロセスが明示的に把握できるよう、上位ラベルを用いて、時間軸に沿った意味連関図を構成した。またその際、死の意味づけと人生の意味づけの相互連関が明らかになるよう布置した。さらに「語りの空間」を描き出すため、同様のラベルを用いて、インタビューが実際にどのようなシークエンスに沿って行われたかを明示する図を作成した<sup>iii</sup>。なお本研究では、全ての分析は理論的背景および研究の問いに照らし合わせ、筆者一人で行った。

### III 結果と考察

#### (1) 家の宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロセス

宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロセスのモデル図を作成した(図1)。また各意味ラベルの具体的な語りのいくつかを、表Iに示した。

図1から明らかなように、Cさんの死生の意味構成は、家と自己との関わりがもっとも明確に交差する、結婚と大事件という2つの転機によって特徴づけられる。

つまり「里も娘達にさあ仏壇の前で手を合わせとは何も言わなかったけども、両親と長男の兄は毎朝お経あげてるような家でした。」と語るよう

表1 意味ラベルと語り例

語り	意味ラベル	語り例
「人生についての語り」	実家は毎朝お経をあげるような家だった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 里も娘達にさあ仏壇の前で手を合わせとは何も言わなかったけども、両親と長男の兄は毎朝お経あげてるような家でした。</li> </ul>
	釈迦の考え方にどっぷり浸かった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 何べんも何べんも聞いている間に、まあ染まりやすかった素地があったんやろなとは思うんですけどね、あの、どっぷり浸かってしまったという。</li> <li>・ だからそういうようなお導きでこういう家へ嫁がせていただいたんかも分かりませんが。</li> </ul>
	嫁いでの30年間は自分を殺してきた、うつ病に近い状態だった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今こないして、ケラケラ笑ろうたりしてますけど、ものすごく、ま、どっちか言うたら、うつ病に近い心理状態できてました。</li> <li>・ 私はここの家に嫁入りしてきて間違ってたんちゃうかなと思うことがいっぱいありました。</li> </ul>
	宇宙の目に見えない力（他力）を感じる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他力の力がある。宇宙のなんかの、自然の力がある。</li> <li>・ 人間として生まれるまでの一粒の細胞からもう何兆という細胞の人間になって生まれてくる、その過程なんか考えたらやっぱり宇宙的な目に見えない力っていうの、自然の力みたいなものを感じんとけいわれても感じてしまう。</li> </ul>
	大事件をきっかけに念仏の意味と必要性を実体験した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ （大事件を通じて）南無阿弥陀仏という言葉がどういうことなのか、この世でなんで必要なかっていうのは実体験した。</li> <li>・ （今では）しょっちゅう心の中で南無阿弥陀仏という言葉が、苦しいにつけ、嬉しいにつけ出てくる生活にやっぱり変わってきてます。</li> </ul>
	本来の自分になることができ、目に見えない世界によって生かされていると感じる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今までうつ病みたいに自分を殺して、なんやもう半分縮んで、自分らしくない、縮んで縮んで生活してた私が、水を得た魚になった。ほんで本来の、私になって。</li> <li>・ 私はそれ（仏さんの力）によって生かされているということで、きてます。</li> </ul>
	年とともにお礼の気持ちを込めて、自然に念仏が言えるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 勿論お話が聞けたりとか、ちゃんとしたお仏壇があってお参りが必ずあるとか、年回忌とかがあるとか、いうようなことがある家やったから余計にそれがあつたと思うんですけども、あの一、やっぱり年とともにでしょうね。</li> </ul>
	なんでもかんでもこころをポンと預けられる場所がある幸せ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ なんでもかんでもすべてなんかこころをポンとあずける場所がある幸せ。</li> </ul>
自分の感じ方とぴったりあった、よい家に嫁ぐことができほんまに嬉しい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私自身がなんかもってこう生まれてなんか、考えたり、感じたりするものと、この真宗の教えとがなんや知らんけどもうピターっとあつてて。</li> <li>・ ええ家に嫁いだな一思える幸せものです。</li> </ul>	

「死についての語り」	本当の自分になれる、あの世に希望を抱いている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>私は、ほんまはこの世でじゃなくて、あの世往ったときに本来の私らしい生き方ができる。</li> <li>もう、この世の仕事が終わっていく先に、ものすごい希望を抱いてしまっている、ようなタイプ。</li> </ul>
	絶対苦のない世界に行く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>別れの悲しみはあってもね。いやー苦の無い世界にいかはって、仏さんのもんに往かはったんやーみたいなそんな感じなんですよ。</li> </ul>
	親、きょうだいの死は天寿を全うしたと、とくに何も思わず受け止めた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>別れは別れ。まあ苦しんで死んでなかったからよかったけどねー。だから特別なことと受け止めてないと思います。</li> <li>(先だった家族が苦のない世界に往ったと) 絶対思います。</li> </ul>
	阿弥陀仏の名前にすべてが含まれているので、魂の行方や墓など死んでからのことにはこだわらない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然に戻りたいという考えを持っているので、そんな、焼いてもうて、骨になって骨壺に入れてもうて、お墓に入る気はさらさらないです。</li> <li>阿弥陀、という名前の世界、の中にすべてが含まれているという宇宙的な、考え方。</li> </ul>
	喜んで死を受け止めたいが、どうなってもしょうがないと受け止める。	<ul style="list-style-type: none"> <li>そういう(死がせまった)ときにこそ、喜べる、これこそ仏の慈悲なんやと分かるような生き方がしたいとは思っていますけども、そんなん夢や思います。(笑)</li> <li>できることなら、そういう(病気になって入院する)経過を辿らずに、あの、往きたいなど、思うてはいるけど、実際に痛かったりねー、しんどかったりしたら、(病院に行かなくてはならないが)それはそれで受け止める。</li> </ul>
「アイデンティティの語り」	真宗と家との深い縁がある。	<ul style="list-style-type: none"> <li>婦人会の役員を私もさせていただいて、本山の**様とはほんとに親しくさせていただいていたという。それと過去、昔から言う本山の**をしてみましたので、ですからもうほんまに縁の深い。</li> <li>自分の人生、70、80ぐらいしかないんだけども、あの、ね、100年以上昔のことからふっと気がついたら繋がってみたいいな。</li> </ul>
	女の一生は樹の植え替えのようなもの。	<ul style="list-style-type: none"> <li>育ってきた植わっている木に喩えますとね、あの、根回しをしてね、植木屋さんが植え替えはるときのように根を切って、細かい木を切って、薦をくくって、そしてよっこらしよと別の馴染んでない土に植えてくれはるのが女性の結婚やと思えます。</li> <li>土壌に馴染むまでにやっぱり10年ほどかかり、10年ぐらい経つと運がよければ子どもができていて、それから細い根っこが、薦が包んである間から伸ばして地面の栄養分をもらって育つていうのが女性の、女の一生というものの一つ。</li> </ul>

注. 意味ラベルは、分析の結果得られた上位ラベルのことである。

に、Cさんは幼少の頃から仏教との関わりを有しており、その関わりを通じて、暗黙のうちに宗教性を醸成させてきた。そしてそうした仏教との関わりを通じて、宇宙的な力、自然の力、あるいは浄土真宗においてとくに重要な概念である他力<sup>iv</sup>の力、と喩えられる目に見えない力によって人間

の生と死は動かされていると自然に感じていたことが語られている。

しかし結婚してからの30年間は本当の自分ではなく、それによって「うつ病に近い心理状態」だったという。また「私はここの家に嫁入りしてきて間違うてたんちゃうかなと思うことがいっぱい

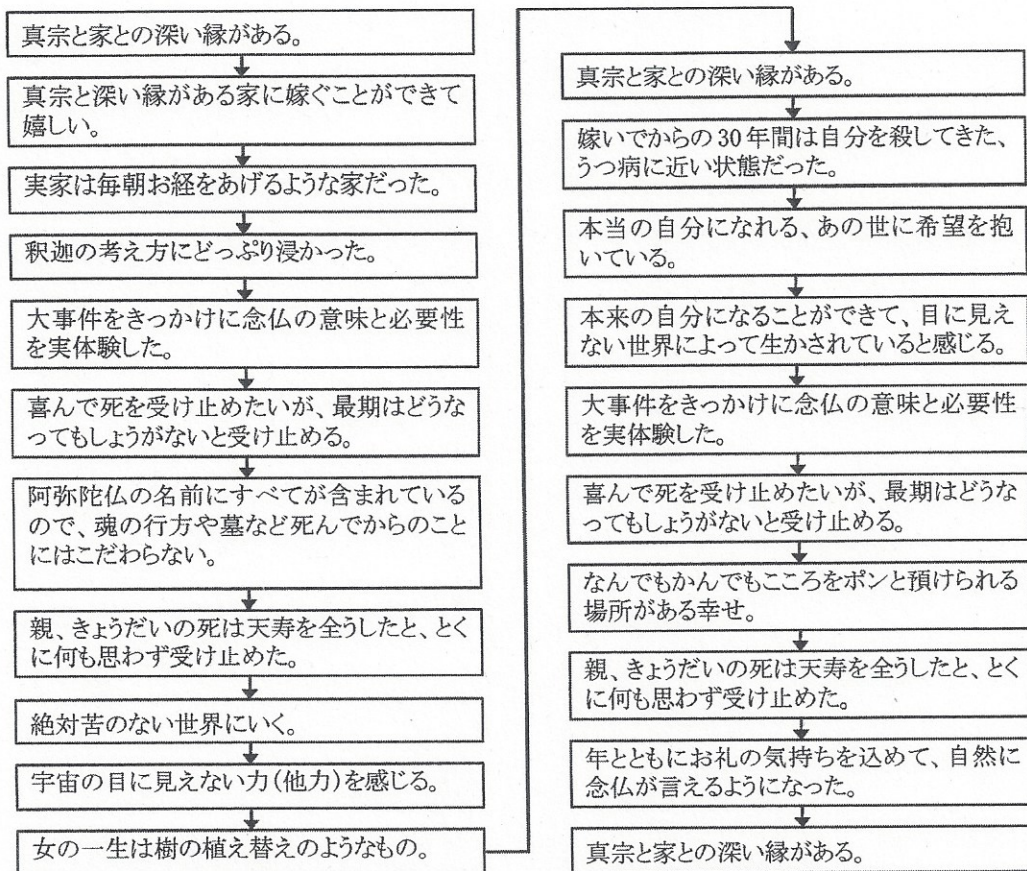


図2 インタビューのシーケンス

いありました。」などとも語っている。そしてそのことが、「私は、ほんまはこの世でじゃなくて、あの世往ったときに本来の私らしい生き方ができる。だから、はよ死にたいとは思わへんかったけども、もう、この世の仕事が終わっていく先に、ものすごい希望を抱いてしまっている、ようなタイプ。」との語りに見られるように、他力の物語を媒介した死後の世界への希望をCさんにもたらしている。つまり本当の自分ではない現状と、目に見えない力によって本来の自分になる事が出来るあの世が対比され、現実世界から逃避するための物語の中で死を意味づけているのである。

ただしこうした意味構成は、親との死別がもたらした家存続の危機、Cさんの表現を用いれば「大事件」という転機によって大きく再構成され

る。つまり浄土真宗の教えによって危機を乗り越えられたことで、念仏が自然に言えるようになる。そしてその体験を通じて家との結びつきを再構成することで、Cさんは「本来の私」を取り戻すことができたのである。そのことは次の語りから明確に読み取れる。「今までうつ病みたいに自分を殺して、なんやもう半分縮んで、自分らしくない、縮んで縮んで生活してた私が、水を得た魚になっちゃった。ほんで本来の、私になって。(中略)なんや知らんけど仏さんからのお力を借りて、なんか(家)残れる方向にいかしていただいたという。ほんまにもう不思議です。ですからやっぱりあの忘れられない。私はそれ(仏さんの力)によって生かされているということで、きてます。」また、この出来事を境に大きく変化しているの

が「宇宙の目に見えない力を感じる。」の意味づけである。結婚から大事件までは、困難な現在から苦のないあの世を志向しているのに対して、大事件以降では「阿弥陀、という名前の世界、の中にすべてが含まれているという宇宙的な、考え方」をするようになり、他力によって生かされている現在に感謝し、死については仏に任せ、こだわらないと語っている。つまり死生の意味づけが死後世界への期待や現実からの逃避と結びつけられる場合には、あの世への期待を助長させる足場として語られるのに対し、生きるための指針や心の拠り所と結びつけられる場合には、この世の満足感や生きがい感を高める足場として語られているのである。このことは生き方が良質であるときは良質の「死生観」と、それらが不良であるときは不良な「死生観」とつながるとする、杉山・方波見・中野・阿部・竹川・中村・佐藤(1986)の報告と関連する。

## (2) 「語りの空間」にあらわれるアイデンティティの構成

時間軸に沿った意味内容の把握とは異なり、意味ラベルを用いてインタビューそのもののシーケンスを布置したのが図2である。

ここから明らかなように、Cさんは自身のライフストーリーを時間軸に沿って、幼少の頃から語り始めるのではなく、まず、いかに家が仏教との深い関係にあったのか、そしてそうした繋がりの中で、いかに自らの人生と死が意味づけられるのかを説明している。つまり自らの宗教性そして死生の物語を、生まれ育った家と嫁ぎ先の家の歴史に、積極的に結びつけながら語ろうとしているのである。これは「自分が生まれる前から存在し、死んでしまった後でも存在し続ける世界のコンテクストの中に、自分自身の人生をなんとか位置づけようとする」(Erikson, Erikson & Kivnick, 1986/1990, p.234) 努力である。またCさんが自ら女性の一生を「樹の植え替え」と比喻するような、アイデンティティの構成プロセスそのもので

ある。

さらにCさんは、インタビューの初め、中間、終わりにおいて、たとえば「婦人会の役員を私もさせていただいて、本山の\*\*様とはほんとに親しくさせていただいていたという。それと過去、昔から言う本山の\*\*をしてましたので、ですからもうほんまに縁の深い。」と浄土真宗と家との深い縁を語っている。つまりそうすることで、「嫁ぐことができて幸せ」との意味づけに一貫するよう、インタビューを通してアイデンティティを再構成しているのである。

一方で「嫁いできてからの30年間は、うつ病に近い状態だった」ことについては多くが語られず、すぐに念仏の意味を実体験した語りが展開される。つまり現在のCさんの死生の意味づけと一貫しない、場合によっては意味構成の障害となるような家との結びつきを得られなかった過去は、積極的に語られないのである。

換言すればこの自伝の語り手は、過去の出来事を伝達しているのではなく、過去を素材に何を物語として作り出すかを決め(Bruner, 1990/1999)、他者に対し自己を選択的に構成しているのである。

## IV 総括的考察

### (1) まとめ

本研究では、家の宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロセスを描き出すことで、単純な死の意味づけと宗教の関係に留まらず、より大きな家という文脈の中で死と生の意味づけを把握することができた。またインタビューのシーケンスについての分析を通じて、「語りの空間」で語り手がどのようなアイデンティティを構成しようとしているのかによって、意味は選択的に構成されていることが明らかとなった。

### (2) 死の意味づけと生の意味づけ

本研究において、「大事件」を境に、辛い現実



からの逃避先として死を意味づける未来志向的な語りと、死を意味づけつつ今を精一杯生きようとする現在志向的な語りという、死生の意味づけの相異なる側面が描き出された。前者は、河合他(1996)が報告した、現世からの逃避という消極的な理由から死を受け入れようとする高齢者の姿と同様である。一方後者は、井上(1980)が高齢者の幸福の本質とした、過去にも未来にも拠らない、現在に生きるという一種の実存的な生き方であるといえる。ただし重要なことは、人生の意味構成が肯定的なものである場合には、現存在における意味が強調されるのに対し、それが否定的なものである場合には、死の意味づけが誘因的に機能するという、すなわち死の意味づけはむしろ人生の意味づけによって規定されるということである。

またCさんは「あずける」「生かされている」「導き」といった言葉を多用している。これは、自らを意味の創造者としてではなく、「宇宙的な、自然な大きな力」の働きによって生かされているものとして意味づけていることのあらわれといえる。そしてこの「あずける」メタファーは、西洋文化の伝統とは異なった、日本文化における死生観である「大きな生命体のなかの人の生死」(やまだ、2007)という概念の具体例を示していると思われる。

### (3) 研究者の文脈という「語りの空間」についての省察

本研究では、Cさんが自らのアイデンティティを構成する様を、Cさんが研究者に対してかにかに語るかという「語りの空間」に着目して分析してきた。しかし物語の語り手と聞き手は必然的に、そして不可避的に「アクティヴ」(Holstein & Gubrium, 1995/2004)にインタビューに関わっているため、研究者の文脈もまた「語りの空間」として機能している。そこで、ここでさらに研究者の文脈という「語りの空間」についての省察を試みることで、その重層的構造を明らかにする。

まず、語り手の振る舞いや語られる内容に影響する、研究者の年齢や関心が「語りの空間」として機能している。たとえば筆者は、僧侶や宗教の専門家ではないが、仏教や浄土真宗について一定の知識を有し、宗教と死生観についての研究を行っているものとして、Cさんから理解されている。そしてこのことが、Cさんが浄土真宗や死について語るための足場を構成しているのである。また同時に、インタビュー開始前にCさんご主人が筆者と同じ大学の出身であったことから「主人は先輩ですわ。」と複数回語っていること、また筆者がCさんの孫のような年齢であったことから、Cさんの語りには生成継承性 (generativity: Erikson et al., 1986/1990) が色濃くあらわれていると考えられる。

次に、研究者の認識やものの見方に大きく影響する語り手の存在、ひいてはインタビューという場における出逢いが「語りの空間」として機能している。つまり筆者は、それまで行ってきた浄土真宗へのフィールドワーク、および僧侶へのインタビュー調査等を通じて、「宗教は死後の世界に関する物語を提供しており、僧侶や門徒はそれを自らの死の意味づけとして採用することで、死の怖れが和らぐ」という想定を構成していた。しかしCさんは死よりも生を、そして自己の宗教性よりも宗教にまつわる家の歴史を積極的に語ることで、その理論の説明可能性の限界を明示し、脱構築を促したのである。そしてそのことが本研究の着想に寄与している。

然るに、本研究で取り上げた「語りの空間」には、語り手のアイデンティティの構成があらわれる第一の「語りの空間」に加えて、語りの内容に影響を及ぼし、生成継承性を喚起させる研究者の関心や年齢という第二の「語りの空間」、そして筆者のものの見方に大きく影響したCさんとの出逢いそのものとしての第三の「語りの空間」からなる、重層的な構造が存在するといえる。そしてこれらの「語りの空間」において、家の宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロ

セスが語られているのである。

#### (4) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、浄土真宗を信仰する1名の女性高齢者のライフストーリーに着目した事例検討を行った。今後は得られた知見の妥当性を確認するために、別の特徴的な事例と比較検討していくことも必要であろう。

#### 引用文献

- J・S・ブルーナー (1999) 『意味の復権 — フォークサイコロジーに向けて』 (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子訳) ミネルヴァ書房。Bruner, J. S. (1990), *Acts of meaning*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Carverhill, P. A. (2002), "Qualitative research in Thanatology", *Death Studies*, 26 (3), 195-207.
- E・H・エリクソン (1977, 1980) 『幼児期と社会 1, 2』 (仁科弥生訳) みすず書房。Erikson, E. H. (1950), *Childhood and society*, New York: W.W. Norton & Company.
- E・H・エリクソン、J・M・エリクソン、H・Q・キヴニック (1990) 『老年期 — 生き生きしたかわりあい』 (朝長正徳・朝長梨枝子訳) みすず書房。Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. (1986), *Vital Involvement in Old Age*, New York: W. W. Norton & Company.
- V・E・フランクル (1957) 『死と愛』 (霜山徳爾訳) みすず書房。Frankl, V.E. (1946), *Ärztliche Seelsorge*, Wien: Deuticke.
- J・A・ホルスタイン・J・F・グブリアム (2004) 『アクティヴ・インタビュー — 相互行為としての社会調査』 (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳) せりか書房。Holstein, J.A., & Gubrium, J.F. (1995), *The active interview*, London: Sage Publications.
- 井上勝也 (1980) 「老人の死生観 — “ポックリ願望” の心理的背景」 井上勝也・長嶋紀一 (編) 『老年心理学』 朝倉書店、188-202。
- 石坂昌子 (2006) 「青年期における死生観と人生観の関連」 『臨床死生学』、11、34-42。
- 伊藤孝治・永崎和美・一柳美稚子 (1991) 「老人の死生観の傾向」 『愛知県立看護短期大学雑誌』、23、101-111。
- 金児暁嗣 (1997) 『日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学』 新曜社。
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996) 「老年期における死に対する態度」 『老年社会科学』、17 (2)、107-116。
- 川喜田二郎・松沢哲朗・やまだようこ (2003) 「KJ法の原点と核心を語る — 川喜田二郎さんインタビュー」 『質的心理学研究』、2、6-28。
- 川島大輔 (2005) 「老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題」 『京都大学大学院教育学研究科紀要』、51、247-261。
- 川島大輔 (2007) 「死生の意味づけと質的研究」 秋田喜代美・能智正博 (監修) 遠藤利彦・坂上裕子 (編) 『はじめての質的研究法 — 事例から学ぶ (生涯発達編)』 東京図書出版、317-339。
- 川島大輔 (2008) 「老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ」 『質的心理学研究』、7、157-180。
- Kvale, S. (1996), *InterViews: An introduction to qualitative research interviewing*, Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Neimeyer, R.A. (2000), "Searching for the meaning of meaning: Grief therapy and the process of reconstruction", *Death Studies*, 24 (6), 541-558.
- Neimeyer, R.A., Moser, R.P., & Wittkowski, J. (2003), "Assessing attitudes toward dying and death: Psychometric considerations", *Omega*, 47 (1), 45-76.
- 能智正博 (2004) 「理論的なサンプリング—質的研究ではデータをどのように選択するのか」 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編) 『質的心理学—創造的に活用するコツ』 新曜社、78-83。
- R・E・ステイク (2006) 「事例研究」 N・K・デンジン・Y・S・リンカン (編) 『質的研究ハンドブック 2巻 質的研究の設計と戦略』 (平山満義監訳・藤原顕編訳) 北大路書房、101-120。Stake, R.E. (2000), "Case studies" In N.K. Denzin, & L.V. Lincoln. (Eds.), *Handbook of qualitative research 2nd Edition*, Thousand Oaks, CA: Sage Publications, 435-454.
- 杉山善朗・方波見康雄・中野修・阿部一男・竹川忠男・中村浩・佐藤豪 (1986) 「高齢者の生き方の質 (quality of life) と「死生観」の関連性についての研究」 『社会老年学』、24、52-66。
- 徳田治子 (2006) 「“人生被害” はいかに聴き取られたか? — ナラティブ実践としてのハンセン病国賠訴訟における弁護士の聴き取りプロセス」 『心理学評論』、49 (3)、497-509。
- Wong, P.T.P., Reker, G.T., & Gesser, G. (1994), "The Death Attitude Profile-Revised: Multidimensional measure of attitudes toward death" In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application*, Washington, DC: Taylor & Francis, 121-148.

- やまだようこ (2000) 「人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学」 やまだようこ (編著) 『人生を物語る — 生成のライフストーリー』 ミネルヴァ書房、1-38。
- やまだようこ (2003) 「フィールドワークと質的心理学研究法の基礎演習 — 現場インタビューと語りから学ぶ「京都における伝統の継承と生成」」 『京都大学大学院教育学研究科紀要』、49、22-45。
- Yamada, Y. (2004), "The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity" In E. de St. Aubin, D. P. McAdams, & T-C. Kim (Eds.), *The generative society: Caring for future generations*, Washington, DC: American Psychological Association, 97-112.
- やまだようこ (2006) 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念 — ナラティブ・ターンと物語的自己」 『心理学評論』、49 (3)、436-463。
- やまだようこ (2007) 『喪失の語り — 生成のライフストーリー やまだようこ著作集<第8巻>』 新曜社。

## 注

- i 本研究では、研究領域としてライフストーリー、方法論的立場としてナラティブ・アプローチの語句を用いているが、他の文脈ではナラティブ、物語、語りの語句を互換的に用いている。

- ii 研究の問いを明らかにするために特殊な事例を研究するという意味で、本研究は「手段的な事例研究」(instrumental case study : Stake, 2000/2006, p.103) であるともいえる。
- iii ここでは、意味内容と「語りの空間」という相異なる2つの視点からの分析を実施することで、質的研究において研究の妥当性を確認するための重要な手段である、トライアンギュレーション (Stake, 2000/2006) を行っている。
- iv 他力とは阿弥陀仏の本願力のことであり、また、はからいなく本願力にまかせることを他力ともいう。なお浄土系仏教において本願とは、阿弥陀仏が立てた四十八願のうち最も重要とされる、生きとし生けるものすべてを救おうとする第十八願のことである。

## 付記

本論文の一部は、文部科学省 21 世紀 COE プログラム (京都大学、D-2) の補助を受けた。

## 謝辞

貴重な時間を割いて本研究にご協力いただき、また私のものの見方に大きな示唆を与えて下さった C さんに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

---

**ABSTRACT****The Role of Religion in Construction of the Meaning of Death and Life:  
Case Study of an Elderly Woman's Life Story****KAWASHIMA Daisuke***National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry*

Although religion has an enormous impact on how people make sense of death and life, this topic has not been substantively discussed. In particular, the “Ie” system, a key socio-cultural context for Japanese religion, has not been considered in depth. Furthermore, the variety of meanings that can be given to death and life, the relationship between those meanings and religious belief, and the products that emerge from this meaning-making process have not been fully explored. This study examined multiple meanings of death and life and their relation to religion by analyzing the life story of an elderly woman who believed in Jodo Shinshu Buddhism. The results suggested that, in the “Ie” system, a lifespan developmental process underlies the meanings constructed about death and life and the relation of both to religion. In addition, this paper discusses the process of identity construction as it emerged through the interview process.

**Key words:** Meaning construction of death and life, religion, elderly, “Ie”, life story

---